

地震予測 3 要素{震源位置,地震規模,発生時}を満たす地震予知法： 2012/1/16

串田氏等(1995)により発見された地震エコー観測こそは地震電磁気学予知法の決定版、以下にその理論根拠を推定試論した。諸氏の検証改修を期待します、

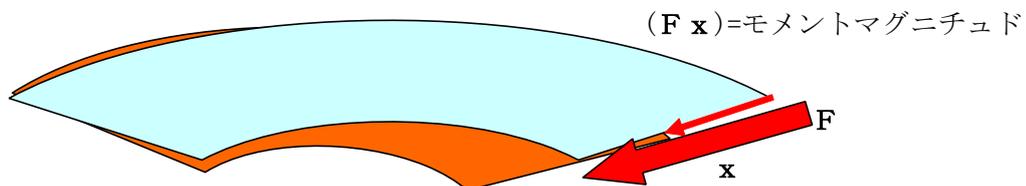
[1] : 地震規模・震源位置・発生時期。

以下では下記サイトを要約補足解説してます。

http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/14368/1/68_p161-178.pdf

(1)弾性反跳理論＝地震エネルギーは大陸プレート移動圧力に伴う地震層＝弾性体歪エネルギー。

<http://www.777true.net/seismology-the-frontline.pdf>



弾性反跳理論は地震学の標準理論で、簡単に言えばバネ捻じ曲げ動作です。上図で空色を地層初期状態、プレート移動力加圧の結果が赤色地層、極論すればバネがその機械変位 x に応じた $M = (F x)$ のモメントマグニチュードのエネルギー値を蓄積、

(2)地震層岩石歪形成量(蓄積地震エネルギー)が地表電荷発生総量を決める!!!。

岩石を超高加圧(破碎)する時、電荷と電磁波発生の観測事実が確認されてる。

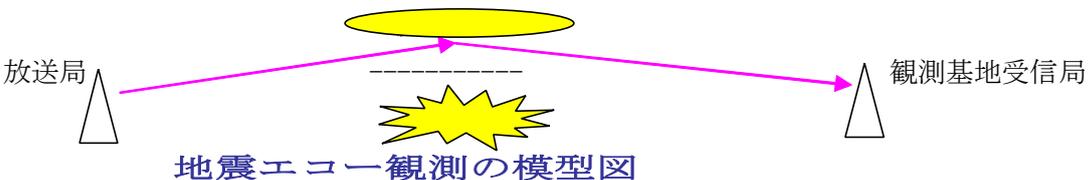
これこそが地震電磁気学を確信する研究者とその支持者たちの根源根拠。詳細再論は後日。

ケロ君の地震予知：静岡市発 大気中イオン濃度測定で地震予知しちゃおう！

<http://www11.ocn.ne.jp/~juno/page5.html>

(a)地表電荷観測：最強地表電荷発生直下が震源域になるだろう。

(b)それは上空帯電誘導で反射層形成、電波異常伝播として時間Tの観測を可能にする。



(3)地震エネルギー $M = F x$. モメントマグニチュードのエネルギー値を概念上で蓄積、

(a)変位 $x =$ 大陸移動速度 $V \times$ 移動時間(歪形成時間) $T \rightarrow x = V T$, $M = F x = F V T$.

(b)震源層圧力 $P \times$ 最終段階-圧縮破碎体積 dV ; $P dV = M$.

地震エネルギーは定圧(地層自重圧力)下での体積圧縮エネルギーとも見れる(上式)、

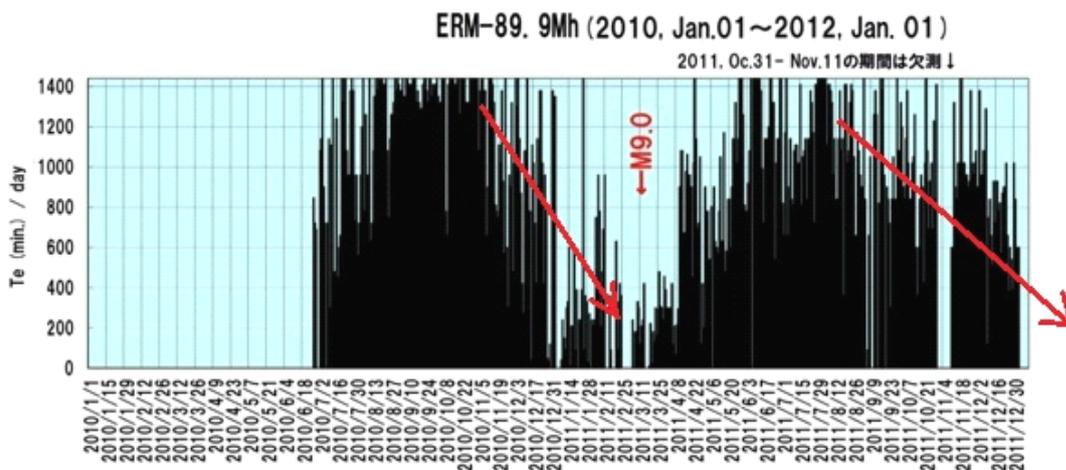
地震発生前の震源層体積圧縮 dV こそが負電荷発生源で、その電荷総量 $Q \propto dV = M/P$.

地震エネルギー M は $Q \propto T_e$ 時間積分値に比例する。これが地震規模予測基礎。

(4)地震発生時期とは歪形成が限界に達し、バネの戻りすべり開始、従ってこの時間区間(位相)では地表電荷発生が終止してくる。→ 数日-数週後に地震発生。

下記写真で 2010/7/2~2011/1/14 頃までが歪形成期、それ以後から 2011/3/11 までが滑り開始地震発生時期。次の山場は 2011/4/8 日頃から開始、データが 12/30 で切断されてるので不明だが、もし下降期ならば以後に地震発生がある、積分量からすれば M8,9 規模!!。

<http://goldentamatama.blog84.fc2.com/>



[2] : 補足

(1)地震規模=地震エネルギー E = 仕事 = 力 F × 地層移動距離 dx = モメントマグニチュード。

(2)マグニチュード : $M = \log_{10} E / 1.5 - 3.2$.

M=5	6	7	8	9
E = 2.0x10 ¹² J	6.3x10 ¹³ J	2.0x10 ¹⁵ J	6.3x10 ¹⁶ J	2.0x10 ¹⁸ J
F = E / x				

地震エネルギーをE (単位joule)、マグニチュードをMとすると $\log_{10} E = 4.8 + 1.5 M$.

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%82%B0%E3%83%8B%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%89>

(3)プレート移動速度=数 cm/年、

地震周期 100 年とすると x = 数 m/100y. rate of spreading along the Mid-Atlantic Ridge averages about 2.5 centimeters per year (cm/yr), 100 年で dx = 2.5m.

<http://pubs.usgs.gov/gip/dynamic/understanding.html>

(4)震源深度D域自重圧力 : $P = \rho g D =$ 岩石密度 × 重力加速度 × 深度。

海中同様にこの自重圧力は準平衡状態では上下左右前後で等方向であるはずだろう。

すると歪エネルギー dE = P dV の体積圧縮 dV でも勘定できるだろう。

模擬計算例) $P = \rho g D = 2700\text{kg/m}^3 \times (9.8\text{m/s}^2) \times 15,000\text{m} = 3.98 \times 10^8 \text{P}$

dE (M=6, dx = 2.5m) = 6.3x10¹³J = P dV = P S dx. → S = (251m)².

dE (M=8, dx = 2.5m) = 6.3x10¹⁶J = P dV = P S dx. → S = (7937m)².

*巨視的観測上で震源は点になります。だが大地震とは大断層面積対応?!
だから大面積隆起(陥没)で大津波駆動可能に、

(5)地震電磁気学は本質的には**高圧下岩石-電荷駆動的**,確かに地電流要素もあるが、

ここで間違えない事は高圧岩石発生電気は**電荷密度(= ρ)駆動的**であり、**電流駆動(= j)**の通常の横波電磁場(**A**)とは異なる。実はこの理解欠如が一つ障害になっている。

Vector potential: $\square \mathbf{A} = -\mu \mathbf{j}$. $\langle \mathbf{B} = \text{curl } \mathbf{A}, \mathbf{E}_t = -\partial \mathbf{A} / \partial t \text{ (横波電界)} \rangle$.

Scalar potential: $\square \phi = -\rho / \epsilon$. $\langle \mathbf{E}_l = -\text{grad } \phi \text{ (縦波電界)} \rangle$.

縦波電荷密度波 ϕ は通常の横波電磁波 **A** 伝播機構とは異なり、その伝播は**量子的 4次元電荷電流保存法則**として動作するので伝播媒体を選ばず、問答無用で海中も地下も伝播します。インピダンス整合の導体接地にあれば、そこで初めて吸収されます。以下の付録にある量子電磁気学を参照、電荷密度波理論は古典電磁気学でないです。

<http://www.777true.net/HAARP-the-Earthquake-Weapon-Mechanism.pdf>

(6)震源点を電流源とみなすには無理がある。電流は閉回路にならねばならない。

電流源は**磁気スピン整列的**、だが超高压下では分子秩序非整列-破綻的でしょう、

極限超高压下では全物質は金属化、すなわち表面に自由電子析出です(物性専門家指摘)。

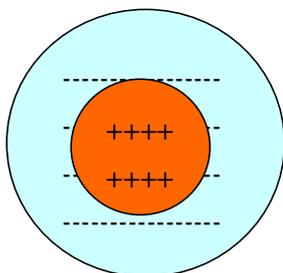
この普遍的事実が解決に導く様に思えます。今後も専門家に質問ぶつけます。

地表全体は負電荷的なのは地核中心が超高温高压プラズマ+イオンだからでしょう。

地軸回転付随で円環電流だから磁極形成NSになる。

(7)震源点末期は**負(電子群)単極電荷源!!!**、イオン正電荷は閉じ込められます。

ガウス電荷保存法則の破れ!!。これが地表に負電荷を析出する。



左図は空色が-電子群、橙色部分は+イオン群、本来ならば±電荷相殺で電気力線は球外部に漏れない。だが現実は違います。それ色の部分が遮蔽壁になって+電荷が外から見えない、単極負電荷になる筈です。以下参照を、

<http://www.777true.net/seismology-the-frontline.pdf>

上記の[2]: **静電遮蔽による反応障壁軽減:**

追記; 明日 1/17 は阪神大震災日、3/11 も二ヶ月後、過ほど被害に真相告白(**地震兵器**)が無いのは世界史的損害と思います。被災者も成仏できません。ぜひ皆様の再考決断を、